

心理学から見た「生者」と「死者」の繋がり－故人との絆の継続に焦点を当てて－

中里和弘(大阪大学大学院／日本学術振興会)

大切な人を亡くした遺族の中には、周囲からの「(月日が経ったのだから) もう忘れなさい」といった言葉掛けに傷ついたり話すケースがある。なぜ遺族はこの言葉に不快感を覚えるのであろうか。これは、死別が客観的事実としての死(物理的存在としての故人の喪失)を前提としながらも、故人が遺族の中で心理的存在として有り続けているからではないだろうか。死別後の遺族と故人との関係性(絆)は、死別研究の中で議論されてきた主要なテーマの一つであり、現在では、遺族は故人との絆を持ち続けること(continuing Bonds : 以下 CB と略す)が臨床・研究分野で広く受け入れられている。CB は“遺族における内的な故人との関係性(絆)の継続を反映した具体的表象(表れ)”と定義され、心理的存在としての故人の認識、故人との心的会話、故人との思い出の品の所有、故人の考えや思いを言動の指針にすることなどが挙げられる。そこで、ワークショップでは、この CB に焦点を当て、先行研究や本研究者がこれまで行ってきた研究を紹介し、CB が心理学でどのように扱われているのか〔CB の評価、CB の関連要因、CB の適応性/非適応性、CB の臨床場面への応用可能性等〕について話題提供を行う。そして、CB について今後の研究課題を整理すると共に、宗教学から CB を解釈することの重要性を考えたい。